生存科学研究所ニュース

Vol.4. No.3. 1989.5.10発行

目　次

●熊谷　洋　新理事長の挨拶……1
●第3回生存科学研究総会……2
「再び生存について」……渡辺　慧…2
「生存について」……井深　大…4
●生存科学ビューポイント……6
●エッセイズ・キュート……7
●ハーバード大学武見講座活動報告……8
●維持会員だより……9
●ニュース・オブ・ニュース……10
●公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース……12
●お知らせ……13
●編集後記……14

発行：財団法人 生存科学研究所
〒104 東京都中央区銀座4-5-1
聖書館ビル303
電 話 03-563-3518

●故茅誠司理事長のあとをお引受けして

財団法人生存科学研究所理事長　熊谷　洋

武見太郎と茅誠司との交友は戦前の理化学研究所で始まった。当時の理研は、日本に於ける総合的な科学研究の必要が認められ、財界の寄与によって財団法人として高峰譲吉らを中心に発足した。武見太郎がはいった時は大河内政敏が所長で、寺田寅彦、長岡半太郎、鈴木梅太郎など物理化学の第一人者と少壮有為の学徒が傘下に集っていたという。研究者は全く自己のアイデアによって、自己の計画による研究を行い、広く批判を受けるという、科学者の楽園といわれる程の研究所で、茅誠司は海底の潜水艦を、飛行機から発見する装置のアイデアを考えていた。その研究は特殊マグネットの研究であったという。一方武見太郎は33才で生物物理的な思索をめぐらして居られる仁科芳雄について中性子の医学的研究に励んだという。

武見・茅の交友はすでにこの時に始まっている。自由研究者としての道に励むと共に、明治・大正・昭和という歴史的時代を生きて来た、恩師・朋友の、人生観と生き様に啓発されて、人間として一層の成熟の域に達した事であろう。この間に武見・茅の間に、強い人間的信頼感と相互尊敬の念が醸成されたに違いない。武見太郎がその生涯をかけて育て上げた、生存科学研究所の初代理事長に茅誠司を選んだのは、正に二人の間の友情と信頼感と人類の将来を考えてのことであった。

茅誠司が「生存科学研究所」初代理事長就任の挨拶として『地球上の生命は極めて貴重な存在である。その中の一員として存在し、その存在を自ら意識している我々人間は、これら生命体と運命共同体をなすと共に、その能力により全生命体存在の責任をも担うものといえます。』と述べられ、これこそが武見太郎の「生存科学」の哲学であると理解されている。更にこの武見哲学の社会的適用とその具体的な方策迄もが秩序立って指示されていることを広い視野に立って述べて居られる。

我々あとに残された者は、茅誠司のこの挨拶と、更に平成元年三月に刊行された『武見太郎の人と学問』を貴重な資料とし、更に産業社会の著しい発展を考慮して、武見太郎の「医療資源の開発と配分」を一歩すゝめ、「生存資源の確保・開発と配分」に迄視野を拡大し、実績を積み上げる事を、生存科学研究所の使命としたいと考えている。

会員の御支援並に民間の御寄付による財団経済の安定化に支えられ、漸く長期的・組織的事業も序につき、執行部の献身的努力による今迄の実績から見て、将来の明るい見通しが期待出来るに至った。このことが茅誠司理事長なきあとの理事長をお引き受けした次第であります。尚昭和37年、文部省の大学管理法案にたいして当時の東大総長茅誠司と十学部長一致して、政治の不当介入を排除した思い出と、卒業式の訓示で〝小さな親切〟、人間生存の最も大切な心かまえ、にふれられた、茅総長の思いやりの心に感めいをうけたことが、茅理事長のあとを引き受けることになった一つの理由でもありました。

皆々様の一層の御支援を御願い申し上げます。

●第３回生存科学研究総会（第44回生存科学研究会）

渡辺慧先生ならびに井深大先生の講演

３月18日、経団連会館において開催された第44回生存科学研究会は、生存科学研究会の第３回総会であり、今年度の研究テーマ「生存の質」にちなんで、「生存について」と題して顧問の渡辺、井深両先生から講演を頂いた。

渡辺先生からは第42回の研究会にも「生存について」のお話を伺っているので、今回は「再び生存について」として内容を進めていただいた。講演は以下のとおりである。

（文責　編集委員）

＊　＊　＊　＊

「再び生存について」

ハワイ大学名誉教授　渡辺　慧

前回は、生存をどう解釈するか、人間が増え過ぎてしまったのでどうするか、についての考えを述べた。乱暴な言い方ではあるが、それは、生まれて来た命は助けるが、生まれる前は増え過ぎないことを考えるということであった。生存には社会的に生きて行くという意味もあるが、本日は前回の続きとして、生物的な意味での生存につて考えてみる。

医学は科学でもあり技術でもあり、それをどう調和させていくかは非常にむつかしい問題である。物理学は、最も客観的な科学であるとして自然科学の手本のように看なされ、生物学もそれになぞらえようという気風があるが、しかし、それは適切ではない。生存科学から社会的面を捨てて生命だけの生命学（生命科学）というが、それについて考えていることを申し上げたい。それは岩波講座「転換期における人間」の中の「生命とは何か」にも書いた。

自然科学が最近変わってきた。それを生命の科学にも取り入れていかなければいけない。生命の問題も昔は哲学の一部であった。その一部を借りてきて科学的に取りあげようというのであるが、今世紀の始め頃からその哲学に経験主義と理性主義の対立が生れ、1950～60年頃まで続いていた。これではどうにもならないので、1960年頃からより深く考えようという方向が出てきた。その一つが1940年頃から始まったサイバネティクスである。これはコントロールの理論で、相互のフィードバックシステムによる。この考え方から見れば、外界のものを直接写すのが自然科学であるというのはおかしい。こちらの見ようで向こうが変わるということは、量子論の様な新しい物理学にも出てきている。自然科学の対象は見ようで変わり得るものである。これは生物についてもいえることである。

もう一つ、今世紀の始め頃から始まったことだが、その重要性が今になつて認められてきたものに、ゲシュタルトの問題がある。これは、外界にあるものは我々が作っているの

ではないか、ということである。音楽も医師の診断もそうであり、外にあるものでもなく内にあるものでもなく、外と内との掛け合いのなかにある。

もう一つの問題は情報である。情報は数字だけであり内容はない。それが役に立つのは相互に約束事が出来ていて、それにより相互に通信（コミュニケーション）が出来ることである。それを捨てたものが情報であり、「これからは情報の時代だ」などというのはおかしい。動物は情報科学を持ってはいないが通信はできる。こう考えてみると、自然科学は今迄と違った考え方をしなくてはいけない。外と我々（内）との界面（インターフェース）が我々の生きているところである。病気と医師の関係も同じで、見方で変わるものである。現象学という哲学の一派（フッサール、メルロポンティーニ等）も同じ様なことを言っている。19世紀末、物理学者のマッハは、原子論的説明に反対し、我々に直接見えるものから始めなければ駄目だとしたが、この考え方が現象学のフッサールにも影響を与えている。

生命についてもこういう新しい見方をしてはどうか。それは一つには全体観、全体として見るということである。ばらばらにしてしまえば無くなってしまうものが、どういうふうに組み合わされて出来ているかを、我々は直感で見ることができる。仏教でもそういうことは言っている。前述の医師の診断もそうである。

現代のニューロ・エソロジー(neuro ethology)は、出発点は動物の行動の本能を外から見て研究していたエソロジーであるが、内省的な心理学、心を入れた行動学である。動物に心がないというのは嘘であり、言葉はないが、心があるとした方が簡単に説明が付く。花の位置を知らせる蜂のダンスも心があるからこそ出来る。言葉になっているものだけから人間の本性を見ようという科学は問題である。動物に心があるということは、証明はないがもっともに見え、共鳴できる。

心身問題については、デカルト流の二元説と、物的な一元説、心だけの一元説がある。最近は心身同一説が認められている。それは、心身は同一であり、それを身体の言葉で現すと物質的なものとなり、心として見ると非物質的なものとなる。二つの書き方（ディスクリプション）があるだけだという。これは私も10年前から言っていることであり、物理で電子が波であるか粒であるかの論争にたいし、波でもあり粒でもある、相補的（コンプレメンタル）であるというのと同じ考えである。

ニューロ・エソロジーの今後の進め方について一つ問題なのは、認識ニューロンが発見され、たとえば3角を認識するニューロンがあるということである。確かにそうであろうが、全てのものに対応するニューロンがあるはずがない。ビット数を計算すると、英語の単語を覚えるだけでも脳のニューロンは一杯になってしまうことになる。認識ニューロンは基本的なものについてだけと考えなければならない。抽象概念の論理は0－1対応で出来るが、人間の好き嫌い等はそれでは対応できない。ニューロンが一つの機能をもつと考えるのはおかしく、電気的状態（ステイ）が0－1の対応をするのではなく、コンティニュアス・バリアブル(continuous variable)がどこかにあって、非常に沢山なものを入れることができるのではないかと考えている。無数のニューロ・トランスミッターが脳のな

かにあって、コンティニュアスにプラスにもマイナスにも働ける。そういう仕掛がなければ、とてつもない大量の知識が頭のなかに入ることは考えられない。そう考えると、ニューロ・エソロジーにはなすべきことが非常に沢山ある。

ものを正確に知覚するためには、たとえば皮膚を圧迫した際、ポジティブに感じる周囲がネガティブに感じるというマッハ・バンド的対応が必要である。人間が嫌なことを忘れるリプレッション（抑圧）は、ニューロンのインヒビション（抑制）による。これも、ニューロンのトランスミッションにおけるケミカル・リアクションのおかげである。そうすると、人間の頭のなかで、トランスミターが働くシナプスが、どうやったら出来るかが非常に問題となる。脳が何を覚えておくかという問題になる。覚えておきたいところにシナプスが繋ってくる。繋げてみる前に、どうしたらそこに繋げたら良いかを、どうして知ることができるのか。脳の発生学みたいなものだが、考えてみると不思議である。

人間の頭のなかで、どういうことが動いているのかというと、インフォメーションが動いているのではない。猿をみて猿と分かるのは、シグナルとしての猿ではなく、個々の実物が概念として（プラントのいうパラジクマ的シンボル：個々であり同時に全体を思い起こさせる種類のもの、が）頭のなかに入っているからである。同じようなことは感情についても起こっている。

これまでのコンピュータは０－１対応で情報が入っているに過ぎない、パラジクマ的シンボルは入っていない。我々の頭のなかに必要なものは、意味があってそれそに感情が乗っているものである。それを入れられるのはバイオコンピュータであり、それを作る方針である。大ざっぱ過ぎるかもしれないが、自然科学は現象学的立場に戻って、人間のあるがままの生き様を、全体としてそのままとらえる新しいものに向かって行くべきであると思っている。

＊　＊　＊　＊

「生存について」

株式会社ソニー名誉会長　井深　大

人間誰でも年を取ってくると命の終わりを考えるようになる。特に病気をするとそれを考え、何とか安心して命を保証してもらいたいと考える。只今渡辺先生は心身一如について言われた。近代医学は人間を複雑な機械装置として考えている。私は、今の医学は部分構造学だと、医師にむかってよく悪口を言う。健康、病気、治療というもののなかに人間の意識や心を無視し、科学的なことを好んで進んできてしまったのが20世紀の医学の姿ではなかろうか。21世紀には、アンドレ・モローが言っているように、科学の世界から精神の世界に入らなければやっていけないであろう。20世紀の医学は考え直しをしなければならない。

今日の医学、サイエンスは、脳のメカニズムが分かれば人間が全部分かると考え、物質

を細かく分けてさえ行けば、また、遺伝子に書かれた秘密を読みさえすれば、人間そのものがすっかり分かると信じて進んできたような気がする。20世紀の終わりには、それだけでは埒があかないという答えが出そうだ。それではどうしたら良いのかといえば、全く心身一如ということに尽きるように思う。今の唯物的医学ではなく、もう少し非物質的な、現実の実際のものに即して人間や人間の心を考えに入れる、ホメオパシー医学といったものが出来上がってこなければ困るのではなかろうか。

古来、医療・宗教・呪いの3者が、複雑に絡み合って人間の病を癒し、安心を与えてきた。今の医学は、安心を与えるのに科学的ということを看板に振りかざしすぎていたような気がする。それに反して、東洋医学は心の問題を大変考え、そのことの方が基本になっている。東洋哲学をずうっとやって来ると、その最後に出てくるのが東洋医学であり、もう一つが「易」であるという。また「易」と医学が手を組まなければ解決しないというのが東洋医学で、哲学的とか思想的というのがその4分の3を占めており、治療というのは僅かであるという。日本で東洋医学というと、すぐ「はり」だ「きゅう」だ「つぼ」だとなって、大変末端の治療手段を取り上げられ、科学的根拠がないといわれるようなとらえられかたをしている。今の医学はどうも心を忘れている。21世紀には、医学のなかにも思想や哲学が入って来なければいけないのではないか。そのために東洋医学の考え方、哲学を突っ込んでいかなければいけないと思う。しかし肝心な中国では、非常に物質的な、唯物的な医学の見かたをしている。

東洋医学に入るのに一番突き当たるものが二つあるが、その一つは「気」という問題である。これを分からなければ、少なくとも信じなければ東洋医学は成立しない。今一つが「易」の問題である。易は根拠の無いものではなく、多くの事実を積み重ねて、それを統計的にかっこ良く処理したものであると思う。今世紀に分かった遺伝子というような考え方が、既に2000年も前の中国の思想のなかに、定着していたんだと言えるくらいの高いものを持っているようである。東洋医学は非科学的だと言われるが、東洋医学のもつ哲学は、我々が考えられない高いものをもっているような気がする。東洋医学の思想では、宇宙の運用と相似的に地球も動いており、その細かいシミュレーションを人間一人一人がやっている。つまり宇宙の摂理と人間の一人一人の営み、あり方とは、非常に相合しているのだというのが東洋哲学の一番の基本の考え方である。その摂理の通りに我々が行動さえすれば、健康であるとか、命を全うするということができるような気がするし、間違ったことをやっていれば、反対のことになるような気がする。

東洋医学と西洋医学との一番の違いは何か。全ての生物の生命を自然のままに任してさえおけば一番無難で、しかも何か故障が起きたときにはこれにたいして防御手段を自分で講じるのだ、それを大切にしろというのが、東洋医学の根本である。その故障を取り去ってしまおうというのが、西洋医学の考えであると思う。癌細胞は毎日出来たり消えたりしているという。西洋医学では、癌は切ってしまえばそれでおしまいだと考え、東洋医学では、癌は最終的な病気であり、なんとか癌にな

ないようにしようとして、僅かな間違いのときに原因をなくしてしまおうという考え方である。

「気」を納得させるのに丁度良いテレビ放送のビデオがあるので、その編集したものをお見せする。

「気」ばかりではないが、東洋医学と西洋医学の違いをもう少し敷衍すると、西洋医学は病気とか疾患を対象とするが、東洋医学は病人、その人を相手にしてやって来ている。前者では症状とか検査データとかの要素を組みあわせて、どういう病気であると決めてしまうと、病気そのものを対象にする。東洋医学は身体の所見から色々な症状を出すけれども、その人がどういう状態になっているかということ、そのまえにその人の体質がどうか、気功がどうかということを全部考えに入れ、それにたいして養生をどうするか、そのために食物をどうするか、気功をどうするか、心の持ち方をどうするかというような、内因と外因を勘定に入れて健康を取り戻そうとする。重い病気を直すというより、少し病状が出てきたときに、それを早いうちに直してしまおうというものである。例えば、癌細胞の所在を早期に発見して、それを消滅させるような養生法を、前癌状態とか前前癌状態とか言って勧めれば、その養生法を真剣に実践するようになるであろう。そういう早期の癌の症状を、マーカなどでなく見る方法がないかということで研究している中国医学の脈波の研究を紹介する。

一寸した風邪、一寸胃腸をこわしたというようなことが、他の臓器にどう影響しているかという見方をすると、今の何々の専門の医学ということではおかしい。専門家は専門家として評価しなければならないが、自分の体ということから考えると、この人の体が健康かどうか、もし体が悪くなるとしたらどういうところから崩し始めるのか、ということがこれからの生命を考えるときの一番大きな問題である。その根本を考えるには、どうしても西洋医学的な唯物的医学ではなしに、前述の「気」とか「脈絡」とかを解明していかなければならない。その手段として、今迄のニュートン物理学を土台にした科学では到底タッチ出来ない、そこらの意識革命を日本がやらなければいけない。今までのサイエンスで出来るものと出来ないものとがある。どうせやるなら大きく網を掛けてやらなければならないのではないかと思う。

●生存科学ビューポイント

「WHOのオタワ憲章にみられる生態学的健康概念」

北里大学医学部教授　高田　勗

昭和53年、武見先生は、健康福祉研究会健康科学部会の研究報告書「健康と生活」に寄せた序文の中で、健康の概念について、名文を載せられている。

「健康は生活の中心現象である。健康なくして生活はないと私は考えている。そして生活の中から生まれる健康こそ、本当の健康であると思う。自らの力が健康をつくる上においていかに重要であるか、自らの知識がいかに重要であるか、他人との共同生活がいかに

重要であるか、そして、少年期から成長期における健康と、さらに老年期における健康を考えるならば、健康の概念は決して簡単なものではなく、人類の生存年齢の延長に従って健康の概念もその施策も異なるものがなければならないと思う。」

この考え方は、平易な言葉の中に健康の捉え方とその対応の仕方を見事に結実させていると私は思っている。

昭和61年（1986年）になって、WHOは「ヘルス・プロモーションのためのオタワ憲章」を提言することになるが、その中で、健康を、身体的な能力であると同時に社会および個人の資源であることを強く意味する積極的な概念としてとらえ、ヘルス・プロモーションの必要性を提唱するに至った。この憲章の中で、ヘルス・プロモーションの戦略を発展させるための本質的な3つの事項をあげている。それは、Caring（健康養護）、Holism（全人的認識）、Ecology（生態学的認識）であるとしている。そして、健康の保持増進には、人々の生活の仕方についての生態学的問題全般にわたる関心と社会的投資の必要性を認識するよう強調している。

ヘルス・プロモーション活動は、健康における公平、公正を目指しつつ、健康状態の差異を少なくして、全の人々が自分の健康の潜在能力を十分に発揮できるような能力を付与するための機会と、資源の確保を目的とすると明記している。

私は、このオタワ憲章を読みながら、武見先生が健康科学部会で述べられた「健康と生活」の序文を思い出し、胸の熱くなるような興奮を禁じえなかった。

健康を個人および社会の資源ととらえ、この資源に健康投資という社会公共的な健康政策が、ヘルス・プロモーション活動を通じて全人的、生態学的認識を基盤として展開されねばならないということを、オタワ憲章においてWHOが提唱してきたことは、まことに意義深い。このことは武見哲学ともいうべき生存の理法に立脚して、生前から世界医師会を場として「医療資源の開発と配分」というテーマの下で討議を発展させてきた成果が、WHOの健康政策に実現の課題として反映してきていると思われてならない。

●エッセイズ・キュート

気にかかる日米関係

FSX（次期支援戦闘機）問題をみていると、日米関係の悪化は明らかだ。

もともと、日本側は、FSXの開発を自力で行いたかった。これに「共同開発しろ」と横槍をいれたのは、アメリカ政府である。

その要求をいれ、共同開発としたら、今度はアメリカ議会が「共同開発はいけない」という。アメリカ議会が反対するのは勝手だがアメリカ政府が、これを抑えようとしないのは、どうしたことか。

共同開発の母体となるアメリカのF16戦闘機の技術は、いまや10年前のお古であり日本が頭を下げて貰うようなものではない。だいいち1650億円の開発費は全部日本の負担である。こうなったら共同開発はこちらから返上としたい。

＊　＊　＊　＊

と、啖呵をきるのは簡単だが、戦後日本がアメリカから受けた恩恵を考えると、そうもいくまい。むしろ、アメリカ議会の反日ムードは、「どうやっても減らない日米貿易の不均衡」に対する焦りと理解すべきだらう。日本側としては、このさい「忍の一字」で交渉にあたり、関係の悪化をさけるべきだ。ところが、日本政府は完全に当時者能力を失っている。竹下さんは得意の「忍の一字」をリクルート対策で使い果たしそうだ。

数年前、アメリカ中西部に進出した日本のある自動車部品工場の幹部が、最近一時帰国したときこのように言っている。

「州政府は、日本企業の進出を大歓迎といっているが、地元の農村では必ずしも歓迎ではない。何で日本人がこんなとろに出てくるのかと、言われたことも一、二回ではない」

今後の日米関係が気にかかる。

(O)

ハーバード大学武見講座活動報告

〈武見研究セミナー〉

2／7　J. Larry Brown
Lecturer on Health Services, Dept. of Health Policy and Management

"Hunger in America : The Physicians Task Force on Hunger"

「アメリカの飢餓—飢餓に対する医師の行動委員会」

2／14　Field Visit
Codman Square Community Health Center, Dorchester

"Community Epidemiology and Outreach"

「地域社会の疫学と地域内活動」

2／28　Magda Peck
Associate Director, Parent and Child Health Services for the City of Boston, Assoc. Prof., HSPH, Boston Univ.

"Infant Mortality in Boston"

「ボストンにおける乳児死亡率について」

3／7　Hugh Fulmer, M. D.
Director, Ambulatory and Community Services, Carney Hospital, Dorchester

"The Community-Oriented Primary Care (COPC) Program in Boston"

「ボストンにおける地域志向型プライマリーケア(COPC)プログラム」

3／14　Dennis Ross-Degnan, Instructor
Stephan Soumerai, Assistant Prof, Dept. of Social Medicine and Health Policy, HMS

"Physician Drug Prescribing Practices"

「医師の処方行動について」

3／21　Robert Blendon, Ph. D.
Professor and Chaiman, Dept. of Health Policy and Management, HSPH

"Access to Health Care in the United States"

「合衆国における保健医療のアクセシビリテ

ィー」

3／28　Howard H. Hiatt, M. D.
Professor of Medicine, HMS and HSPH
"Medical Lifeboat"
「医療の救命ボート」

3／1　Dr. Takashi Wagatsuma, M. D.
Director, Dept. of International Cooperation, National Medical Center Hospital, Tokyo
"Family Planning in Japan"
「日本の家族計画」
（武見フェロー　上原鳴夫氏より）

〈武見フォーラム〉

維持会員だより

この１年、「健康の最小単位としての家庭」研究会（代表：小林　登国立小児病院長）の１メンバーとして、さまざまな立場からの家庭や健康についての貴重なご意見を伺うことができた。この問題について筆者なりにいろいろ考えてきたが、中でも最近の親子のあり方と、その背景が念頭を離れなかった。新生児期からの親子のきずなの重要性が強調されてきているとはいえ、乳児保育は増加の傾向にあり、必ずしも望ましい方向に向かっているとはいえない現状である。また幼児期の子どもは元気一杯、活発に遊ぶことが必要であるが、いろいろな塾に子どもは通わされ、遊ぶ時間も乏しくなっている。このことは学童期に入ると一そう顕著になり、もはやギャング・エイジの子ども達が群れて遊ぶ姿を見ることは少なくなった。思春期に入れば、登校拒否やいじめ、さらにさまざまな非行の問題が噴出し、いろいろと対策がとられているが一向に減少の気配はみられない。こういった状態に対して、親や教師さらに小児科医もどう対処してよいのか判らないというのがその実情である。

わが国は経済的に豊かになり、高度情報化社会に突入し、今や世界一の債権国になろうとしている。このような日進月歩の社会の変化に対して、子ども達が示すさまざまな問題はこのような社会の流れに対する警告のように思われる。この中で、何が失われたのか、そして何を取り戻さなくてはならないのか、今一度じっくりと考えてみる必要があるように思われる。

ポストマンはテレビをはじめとする画像情報の氾濫のため、子ども達は親や教師はいうに及ぼばず、他の大人達の真面目な意見に耳をかそうとはしなくなっていると警告している（ポストマン：子どもはもういない。新樹社、1985)。子ども達は氾濫するメディアのため好奇心が乏しくなり、大人の秘密を何でも知って「無邪気」さがなくなり、それと共に「羞恥心」を失ってしまっている。このような事態を改善するためには子どものメディアへの接近を統制する必要がある。そしてメディアの内容と価値について、親や他の大人達がたえず批判を出しつづけることが大切である。しかし、こういったことは時代の流れに逆行して行くことになるわけで、親や大人の側にそれだけの覚悟がなくては実行するこ

とはできない。

現在のこのような時代の流れの方向に、誰しも内心には危惧の念を抱いているのではないであろうか。１人当りのエネルギー消費量をさらに増大させて行くことについては環境問題もからんで危険信号が出されている。医療技術の進歩は目ざましいが、遺伝子工学の臨床への導入や、脳死を前提とする心臓移植による延命など、核エネルギーの解放と同様に人類がパンドラの箱をあけてしまった現状にわれわれはとまどいを感じてしまつているといつてよいであろう。その一方、日常的な診療のごく当り前の医療には問題が山積している。

（会員 長畑正道、筑波大学 心身障害学系教授）

ニュース・オブ・ニュース

研究所日報

３月２日　昭和63年度第２回理事会
３月28日　昭和63年度第２回評議員会
３月29日　昭和63年度第３回理事会

＊　＊　＊　＊

評議員会ならびに理事会

３月28日㈫午後３時30分から、研究所会議室において昭和63年度の**第２回評議員会**が開催され、翌日の理事会へ提出予定の「生存科学研究所平成元年度事業計画ならびに予算案」について審議が行われた。

会議では、同時に「公益信託武見記念生存科学研究基金事業計画・予算案」も説明され、財団と基金とが一体となって行う生存科学研究協力体制が明確にされた。出席の評議員からは、今後の研究活動についてニードの確実な把握や財政基盤の確立の方策等、建設的な意見が活発に提案された。

＊　＊　＊　＊

翌３月29日㈬午前10時から、同じく会議室において、研究所の昭和63年度**第３回理事会**と基金運営委員会が合同会議の形で開催された。

先ず、これまで財団と基金とがそれぞれの機能を生かした役割分担のもとに、研究・運営を行ってきたが、今回さらに両者の責任分担とその総合運営体制を明確にし、新理事長の下に事業の強力な展開を図る必要があるので、会議を合同で行う旨の説明があり了承を得た。このため、基金の「平成元年度事業計画ならびに収支予算案」と財団の「平成元年度事業計画ならびに収支予算案」が一括して説明され審議に入り、満場一致で可決された。

最後に、次年度の各種事業の責任者と委員を早急に決め、これ等の人々が役員を構成して本格的に行えるよう、任期満了に伴なう次年度新役員選出については、最終取纏めを理事長に一任することが全員一致で可決された。

＊　＊　＊　＊

次年度事業計画と収支予算では、本格的研究の財政基盤の確保のために、継続寄付に相当する維持会員のより一層の拡大が必要であり、それに向けて、事業展開との関連計画が説明され、全員の努力が要請された。

研究所の次年度事業計画の概要を説明すると、自主研究の３本柱として「生存の理法に関する基本哲理」「社会的展開の理法の研究」「社会的実践としての地域包括医療」（総合保

健政策）があり、第一の柱では東西哲理に関する研究が合せて行われ、第二の柱では医・薬に関する研究が、第３の柱では新しく産・官・学を一体とした実践的な研究が計画され具体的に準備されている。さらに、基金で行われた各種研究分科会の多彩な研究との有機的連携も計画されている。協同研究では、従来からのハーバード大学との提携事業は、学問的研究を軸として武見フェローを中心とした国際的展開への積極的協力を続けるほか、設立に協力した環太平洋産業関連分析学会(PAPAIOS)その他の団体との協同研究を新に開始する。受託事業や講演会活動もより積極的に展開する計画であり、研究所の学術雑誌の発行も予定されている。そしてこれらの広範な事業展開を図るため、事務局体制を早急に強化する、というものである。

予算における収入の部は、基本財産収入２千万円、基本財産運用収入４千８百万円、継続寄付金収入２千万円を含めて当期収入合計１億１千８百万円。支出の部は、管理費４千８百万円、一般事業費６千７百万円、基本財産購入支出２千万円を含め１億６千５百万円、これに前期繰越収支差額を当て、次期繰越収支差額は２千３百万円となる計画である。

なお基金の事業に関連して、武見記念論文・資料集『武見太郎の人と学問』が丁度この会議の日に完成したことが報告され、披露し得たことは喜びであった。

＊　＊　＊　＊

生存科学研究所事務局人事異動

これまで研究所事務局として勤務していただいた佐々木文子女史、楠本陽子女史の両名が、３月31日付けで退職された。二人とも募金活動に、研究会の準備に、ニュースの発行にと大変活躍し、殊に佐々木女史には財団設立当初からお手伝い頂いた。感謝の意を込めて報告する。

研究所ではこの機会に、愈々本格化する各種研究に対応出来るよう、新任の上村大八郎事務局長、岡田衣代、山崎朝子両女史による新たな事務局体制で活動を続けながら、今後更に強化していく予定である。

会員諸兄に御披露するとともに、研究事業の推進のため、事務局への御指導・御協力をお願い申し上げる。

維持会員異動・寄付のご紹介

（平成元年２月１日～３月31日）

入会

・個人

清川謹三　医療法人　清川病院理事長
白幡静夫　白幡耳鼻咽喉科医院
米永正敏　福岡県立高等学校　教諭
吉村　章　順天堂大学哲学研究室　教授

退会

井上節齋　（逝去のため）
古澤健彦　（　〃　）
小林金市
児玉嘉生

寄付

・法人

㈱安川電機製作所　330,000円

公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース

基金日報

3月17日　第6回生命倫理の理念と科学的接近研究分科会

3月18日　第44回生存科学研究会（第3回総会）

3月22日　第5回武見文献による生存の理法研究分科会

3月27日　第7回健康の最小単位としての家庭研究分科会

3月29日　昭和63年度基金運営委員会

4月8日　第3回医薬品産業組織のあり方研究会

4月15日　第7回健康投資と地域医療の展開研究分科会

4月24日　第8回健康の最小単位としての家庭研究分科会

＊　＊　＊　＊

第3回生存科学研究会総会（第44回例会）

3月18日㈯午後2時から、大手町経団連会館において、第3回生存科学研究会総会が開催された。今年度のテーマ「生存の質」シリーズの締め括りとして、渡辺慧先生から「再び生存について」、井深大先生から「生存について」それぞれ講演をいただき、（講演の概要は本文参照）続いて活発な総合討論が行われた。

続いて総会議事に入り、各研究分科会の活動状況報告、今後の研究体制の検討、財団からの研究雑誌発行計画の報告、基金からの武見記念論文集・資料集『武見太郎の人と学問』の出版の報告と購入希望者の募集、更に次年度研究会の研究テーマの検討に入り、次年度は、「地球環境と生存科学」をテーマとすることが決定された。

総会終了後、会場を銀座の研究所会議室に移して、恒例の懇親会が開かれた。

新規加入生存科学研究会員

白幡静夫

吉村　章

＊　＊　＊　＊

公益信託武見記念生存科学研究基金運営委員会

3月29日㈬午前10時から、研究所会議室において、財団法人生存科学研究所の理事会と合同で基金の運営委員会が開催された。その模様は、ニュース・オブ・ニュースの理事会報告を参照されたい。基金と財団の役割分担で、生存科学研究事業の幅広い推進体制が整備され、その協力関係の意義が御理解いただけるものと期待される。

お知らせ

第45回生存科学研究会

W・レオンチェフ教授による特別講演会

日　時　5月13日(土)午後2時から

場　所　大手町　経団連会館

今年度の主題「地球環境と生存科学」の始めとして、環境問題を含めた産業活動分析に取り組んでいるレオンチェフ教授の講演会を行います。教授は生存科学研究所の顧問でもあります。

＊　＊　＊　＊

生存科学研究会分科会報告

5月19日(金)　生命倫理の理念と科学的接近
PM13：00

5月20日(土)　武見医政の理論と実証
PM14：30

5月22日(月)　武見文献による生存の理法
PM15：00

＊　＊　＊　＊

『武見太郎の人と学問』出版

生存科学研究基金・武見記念論文編集委員会による武見記念論文・文集ならびに武見資料集『武見太郎の人と学問』が3月28日㈱丸善から出版されました。既に予約購入された会員・維持会員も多いと思いますが、まだお申し込みでない方は、是非お申し込みください。

会員・維持会員への特別価格　6,000円
一般市販価格　22,000円

お知りあいの方で御関心をお持ちの方へも、御紹介下さい。

＊　＊　＊　＊

H.H. ハイアット教授著

America's Health in the Balance
choice or chance?

生存科学研究所顧問、元ハーバード大学公衆衛生大学院学部長、H.H. ハイアット教授の表記の著書が、アメリカでこの度出版されました。彼の幅広い経験で、経済的、医学的、社会的にアメリカの医療問題を論じ、将来への示唆に富む書です。維持会員へのサービスとして、特別価格でお分けいたしますので、御希望の方は研究所へ。特別価格　2,000円

＊　＊　＊　＊

第4回生存科学研究所講演会（千葉講演会）

テーマ「社会発展と医療」

日　時　平成元年5月20日(土)
午後2時30分～5時30分

場　所　千葉県医療センター講堂

講　演

(1)　地域にとって医療とは何か
渡辺　武　千葉県医師会会長

(2)　生命科学と生存
青木　清　上智大学
生命科学研究所所長

(3)　産業社会の発展と生存問題
土屋健三郎　産業医科大学学長

(4)　21世紀における福祉―
経済福祉から人間福祉へ
筑井甚吉　大阪大学名誉教授

主　催　財団法人生存科学研究所
千葉県医師会

後　援　千葉県
千葉県教育委員会

本講演会は、生存科学研究所が首都圏で開催する初めての公開型講演会であり、また、千葉県で行う実践的地域包括医療研究の基盤がためをも目指すもので、医療関係者、産業人、行政、一般市民の参加を広く求めています。

生存科学研究会会員・研究所維持会員諸兄の御参加をお待ちします。会員以外の方も参加できます。お問い合わせは研究所へ。

編集後記

新しい理事長が決まり、新しい運営体制が確立し、財政基盤も一応初期の予定に達し、新しい事業計画が採択され、協同研究体制も新たに多面化され、事務局も新しく生まれ変り、生存科学研究所の新しいスタートが切られました。

財団誕生から5年、関係した方々が大変な努力をしてこられましたが、愈々これから、研究成果が大きく総合されて期待通りの実を結び始めることでしょう。しかし、理事会の報告記事にもあるように、研究活動拡大のためには、財政基盤のより一層の拡大が必要です。維持会員募集に御協力ください。(N)